

図書館紹介

マサチューセッツ工科大学 時崎 久夫 (外国語学部教授)



MITの略称で知られるこの大学は、マサチューセッツ州はボストンの北隣、ケンブリッジにある、工業系を中心とする大学です。しかし人文科学も盛んで、私が訪問研究員となっている言語学哲学科は、ノーム・チョムスキーをはじめとするスタッフにより、理論言語学を半世紀以上にわたり、リードしてきました。

その図書館も、いくつかに分かれています。私が利用している Hayden Library は、自然科学と人文科学の多数の蔵書を有しています。言語学については、世界の言語の記述文法と理論研究の書籍が2階の一角に集められていて、利用しやすくなっています。

MITだけでなく、アメリカの図書館一般に言えることかと思いますが、館内のコピー機では、印刷するとお金がかかりますが、スキャンだけしてファイルをメモリスティックに保存するかメールで自分に送信すれば無料です。また、飲み物はふたがしてあれば、持ち込んで飲んでかまわないというルールになっています。ケンブリッジ公共図書館には飲食自由の読書スペースもあります。

オンラインカタログも充実していて、館内蔵書や別書庫蔵書の検索、また近郊の協定大学、さらにWorldCatによる全米・世界の蔵書検索と相互貸借がネット上で自分で申し込めるようになっています。貸し出しは1か月、次の利用者がいなければ最大5回まで延長できるというルールです。

図書館サイトからは、学術雑誌の電子版(JSTORなど)にアクセスして、図書館の外(例えば自宅)からでも、論文を無料でダウンロードすることができます。これまでなら、検索して書庫で探して、製本された重い雑誌をコピー機まで持って行って、2ページずつコピーして、という手間がかかるところを、これならあっという間にパソコンに取り込めます。電子ファイルなので、論文内のキーワード検索も簡単。ちょっと前まではコピーしてから、スキャンして電子化していたのですが、これも要らなくなりました。学術機関リポジトリを構築するために使用されるDSpaceもMITと

ヒューレット・パッカートにより共同開発されたもので、博士論文などがダウンロードできて便利です。ネット接続も、館内はもとより、キャンパス中で可能なので、どこにいても図書館にいるのと同じとも言えます。

MITらしいと言えば、工科系らしく?学術雑誌コーナーにまぎれてOtaku USAという日本アニメのファン雑誌が購読されていたり、Mangaコーナーとでも呼ぶべき、日本のマンガの英訳単行本の書架が5つくらいあつたりします。手塚治虫や高橋留美



子はともかく、『クロマティ高校』なども英訳されて並んでいるのには、びっくりしました。

何よりも素敵なのは、こうした自由な雰囲気と、ボストンとケンブリッジを隔てるチャールズ河に面した南向きの閲覧室でしょう。窓際にはソファがあって、陽射しを浴びて光る河と対岸のボストンの街並を見ながら、学生さんが本を読んだり、パソコンを打ったり、昼寝をしたりしています。

大学に入学して、学び始めた理論言語学は、遠いアメリカの北東部で行われているもので、自分が関係することなど夢にも思

いませんでした。ですから、今、そこに自分がいて、研究が出来ていることに感謝せずにいられません。そして今も図書館でチャールズ河を見ながら、MacBookのキーを叩いているこの時間が、非現実のように感じられます。



ある日は、斜め前の机で、音韻論の泰斗、モリス・ハレ教授が学術雑誌をめくっていました。そしてまた、統語論のノーヴィン・リチャーズ教授が入ってきて、本を探して回り、大きな袋2つに本を詰めて出て行きました。私も、何かを成し遂げるために、もうしばらく、ここで励むつもりです。

と、ここまで書いたところで、図書館サイトを見てみると、紹介VTRがあることを発見。百聞は一見に如かず、ご覧下さい。

<http://libraries.mit.edu/about/about.html>